（第二稿）

令和元年度　芸術文化祭演劇部門

ほ(っ)とけ！

　　　　　　　　作・甲斐清和高等学校演劇部

【あらすじ】

学園祭実行委員会として集結した面々。開祭式を盛り上げるイベントを考えることになったが…。

【登場人物】

荊澤…真面目かな変かな。仏女。

小尾…学園祭実行委員に立候補！やる気があふれているが。

亀谷…まじめ？いたってフツーな男子高校生。隠れ仏教好き。

田辺…冷静、賢い、性格わるい（たぶん）

沼田…くじ引きで委員になった。だるだるな感じ。

・開幕。真っ暗。視聴覚室のような装置。

・荊澤が舞台上に寝転がっている（見えないけど）。

荊澤「なにも、見えない…。何も、聞こえない。これが真の闇だというの？」

荊澤「この闇の中では、月明かりのない夜でさえ、明るく感じる･･･」

・ＢＧＭ

・沼田、どかどかどかどか登場（暗いので声のみ）

沼田「おい、なんだよ、ここ、なんでこんなに暗えんだよ。ちっ、まだだれも来てねーのかぁ？」

・沼田はける（どかどかどかどか）。

・しばらくすると、小尾が入ってくる。

小尾「（暗さに驚く）うわっ！何！めちゃくちゃ暗いんだけど！･･･えーっと、電気電気～（ポチッ）」

・明るくなる。小尾はきょろきょろとあたりを見回す。

小尾「こんなにぴったりカーテン閉めてる、暗いわけだ」

・荊澤は小尾の様子をうかがいながら、見つからないように教室内を動いていく。

小尾「そうだ！資料！（くるっと振り向く）」

荊澤「！！！（しまった）」

小尾「（驚く）わぁぁぁあぁぁぁぁっ！」

・転げるくらい驚く。

小尾「ああっだふぢｄｈしｄじゃおじゅｓでゃｊどｊｆぱじゃ」

荊澤「あの」

小尾「さかｋｄｈだうｈｓｋｄじゃｊｂかｓｈかｊこｃだ」

荊澤「あの！」

小尾「ｓｄじゃｓだｋｄｃ；あぁｆぁｆ；あヵ」

荊澤「あの！！落ちついて！」

小尾「へ」

荊澤「大丈夫だから！！！」

小尾「･･････お、驚かせた元凶でしょうが！」

荊澤「ま、そうなんだけど」

小尾「（ばつが悪そうに咳払い）で、なにやってたの？あんなに教室暗くして」

荊澤「まだ、誰も来ないと思って。で、ちょっと」

小尾「だから、誰もいないからって、カーテンぴっちり閉めて部屋暗くして何やってたの？」

荊澤「そう、ここのカーテンすごく光を遮断するから最高で、集合場所がここって聞いた瞬間にもう待ち遠しくなっちゃって」

小尾「ちょっと！話聞いてる！？そのすごく光が遮断された空間で、待ち遠しくわくわくしてたきみが何をやってて、その結果、僕をみっともなく驚かせたのかって聞いてるの！」

荊澤「とりみだしたこと気にしてるんだ」

小尾「くっ、それを言うな」

荊澤「･･･なにをしていたのかは、ちょっとあの、言えなくて。でも、悪いことはしてないから」

小尾「悪いことしてた人は、自分から悪いことしてたって言わないものだ」

荊澤「まぁ、そうなんだけど･･･。ところで、えと、ずいぶん早く来てるのは同じじゃ･･･」

小尾「僕は、ここの準備をしにきたの。この集まりの責任者だから」

荊澤「そうなんだ。･･･驚かせて、ごめんなさい」

小尾「（うろたえる）ま、それについてはいいけど、でも、やっぱり何してたのかは気にな･･･」

田辺「失礼します」

小尾「いけない！もうこんな時間！準備で早く来たのに」

荊澤「あ、手伝う」

・机を動かし、話し合いの形態に。

・資料を配布。田辺も手伝う。そうこうしているうちにバタバタと急いで亀谷が来る。

亀谷「よかった･･･。間に合った」

田辺「亀谷も委員か。しかも、担当まで一緒とはね」

亀谷「おお、よろしくなー」

・資料準備も整い、時間となったが１人きていない。

小尾「あと１人来てないな」

・廊下（舞台袖）の方まで様子を見に行く小尾。しばらくして戻る。

小尾「まだ来ていない人もいますが、時間を過ぎているので始めたいと思います」

小尾「まず、自己紹介から。　僕は１組の小尾です。この会の責任者であり、学園祭の実行委員長もつとめています」

・一同委員長だと知ってざわつく

小尾「じゃあ、順番に（うながす）」

荊澤「５組の荊澤です」

田辺「２組の田辺」

亀谷「３組の亀谷」

小尾「さっきの様子だと田辺さんと亀谷くんは知り合いみたいだね」

亀谷「まぁ、２年のとき同じクラスだったから」

小尾「じゃあ、いい連携期待してるよ」

・小尾が一同を見渡す。

小尾「では、改めて学園祭実行委員オープニングイベント担当部門会議を始めます」

亀谷「え、これオープニングイベント担当なの」

田辺「知らなかったのか」

亀谷「いや、うちの担任、時間と場所しか言わないし」

小尾「荊澤さんは知ってた？」

荊澤「うん」

小尾「そう、ならよかった。（間）ここに集まってもらったみんなは、オープニングイベント担当！オープニングといったら、学祭のいちばんの花形といっても過言ではない。ここにいるメンバーで作るオープニングが学園祭全体の出来を決めると言ってもいい･･･。ということで、気合いを入れて企画を考えていきたいと思います」

亀谷「学祭いちばんの花形ぁ？やべー。去年のイベントも思い出せないんだけど･･･。何してたっけ」

田辺「確か、ダンスだったか？うん、印象にないな」

荊澤「･･･覚えてないなぁ」

小尾「･････････学園祭の始まりを華々しく飾るオープニングイベントが、こんなうすい印象なんて･･･」

亀谷「正直、その後のミュージックコンテストとかパフォーマンスコンテストとかの方が印象残ってるよなぁ」

田辺「確かに。毎年恒例柔道部によるパフォーマンスは忘れられないな」

亀谷「わかるわかる！あの筋肉パフォーマンスね！時々ひょろっとしたのが出てきておもしろかった！」

荊澤「それ、私も覚えてる」

・小尾以外の３人が脱線して話し出す。

小尾「あー、３人とも、おしゃべりはそのくらいにして、話を戻すよ」

３人「（返事）」

小尾「とにかく、去年までのオープニングイベントは、学園祭の花形であるにもかかわらず、生徒のみなさんの印象に残っていないということが、残念ながらここで証明された。ということで、生徒の心に一生残るようなオープニングイベントを僕たちでつくりましょう！」

田辺「多くの場合は、エンディングイベントの方が華々しくないか？」

小尾「いつもと同じではだめなんだ。いつも同じようなことしてるから、印象に残らないんだろ。だから、今年の学園祭は、イメージチェンジを計るためにも、オープニングからすごいことやって、生徒にサプライズを与える計画」

田辺「委員長の意向は分かった。それで、自らここの担当になったってことだな」

小尾「その通り」

荊澤「それにしても、去年って何だったっけ？」

小尾「そんなこともあろうかと･･･、ここに集まってもらった。昨年のオープニングイベントを動画で流します」

・ＢＧＭスタート

・昨年のイベントが流れる（実際にやる…ダンス）

・小尾も衣装？小道具？など装備し、どセンターでぶっちぎりのダンス（５人がバックダンサーのていになる）。

・最後の「学園祭、始まるよ～」で、ダンサーはけ。小尾も元の姿に戻る。

荊澤「あー、こんなかんじだったかも」

田辺「委員長、去年もオープニングイベント担当だったんだな」

亀谷「つか、やけにリアルな映像だったな」

荊澤「わたしも、そう思った！まるでそこで踊っているかのよう…」

・小尾が３人のやりとりをさえぎる。

小尾「はい、それでは昨年度のものも確認したので、早速、今年度のイベント内容を考えたいと思います。何か意見ありますか」

亀谷「え、いきなり意見求められるの！」

田辺「何をするかも分からないのに、突然考えを求められるなど･･･。委員長から何か原案はないのか？」

小尾「僕が原案出したら、それでいいでーす、になるから。オープニングを飾る、生徒があっと驚くような内容にするには、固定観念を持たず、自由に意見を出し合った方がいいと思う」

荊澤「言ってることはもっともだけど」

小尾「なにか」

荊澤「なんでもない･･･」

田辺「なるほど。しかし、いきなり･･･、特に亀谷はオープニングイベント担当であることも知らずにここに来たのだから、そんなにすぐに名案が浮かぶものではない。全員が何か前向きな話し合いをするヒントのようなものがあればいいんだが」

小尾「最近はやっているものとかどうかな」

亀谷「はやっているものか･･･。それだとやっぱり音楽やダンスになっちゃう気がするんだけど」

荊澤「はやってるものだと、みんなにすぐわかっちゃうんじゃないかな」

小尾「それもそうだな」

田辺「委員長は、何かあっと驚かせるようなことしたいんだものな」

亀谷「いっそのこと、劇でもやったらどうよ？」

田辺「いや、それだと演劇部からクレームが来るかもしれない。演劇は自分たちの領分だ、とか言いそうだ」

亀谷「そんなこと･･･って思うけど、まあ、今の演劇の顧問、演劇命！って感じだしな。ありうる･･･」

小尾「あの先生は敵に回したくない･･･。今年の演劇部の時間配分を増やせって、だいぶごねられたんだから」

荊澤「そうなんだ」

小尾「そう！体育館使用時間を演劇部だけ６０分よこせ～とか無理に決まってる！今、１５分だよ？いきなり４倍にしろっておかしいだろ？ま、すっごい勢いだったから１０分延長の２５分にはしたんだけど」

荊澤「屈してる･･･」

小尾「屈してない！」

亀谷「ま、まぁ、そんなこといいんじゃないの。ほらほら、オープニングイベント話し合うんだろ？っていうか、こういうのって自分たちの得意分野とかで考えた方がいいんじゃない？」

田辺「それもそうだな、何かの会話の中から新しい発想が生まれる可能性もある」

亀谷「おっ、田辺～、ノリいいね～」

田辺「ノリとかではない、効率的に物事を進めようとした結果だ」

亀谷「俺はね、サッカー好きなの！やるほうじゃなくて、見る方ね」

荊澤「そうなんだ」

亀谷「おう、口だけだったら、レアルマドリードの監督もできるんじゃね？」

田辺「調子にのるな」

小尾「サッカーか…。ステージ上のイベントにどう持ち込めるかな…。田辺さんは？」

田辺「人間観察」

小尾「え」

田辺「人間観察が好きだ。とことん観察して、その人の良さも悪さも余すところなく把握し、良いところを引き出す人材活用をするとともに、弱みを握って思うままに動か…」

小尾「（さえぎって）ああ、いい、そこまで！（焦ったように）えっと、荊澤さんは？」

荊澤「え、わたし？わたしは、あの、その…」

田辺「言いにくいこと？」

荊澤「えと、そういうわけじゃないんだけど…あの、その」

亀谷「急に話振りすぎだって！つか、これ一回持ち帰らない？ゆっくり考えてまた意見持ち寄るって感じでさ。初日って普通顔合わせだけだろ？」

小尾「それは無理。今年は校舎の改修工事の関係で夏休みが早く始まる分、学園祭が前倒しになっている。日程的にかなり厳しいんだ。ここで大枠の方針を決めて、次の会を明日開いて１、２年生に提示していかないと準備が間に合わない」

荊澤「すごいタイト」

小尾「そうなんだ！だから、はい、考えるよ！」

亀谷「マジで原案くらい用意してくれればいいのに」

小尾「（怖めに）何か？」

亀谷「（焦る）いえ、なんでも！でも、やっぱりいきなりは無理。今日の今日は無理！…果報は寝て待てっていうじゃん。一回休もうよー。焦るの良くないよ」

小尾「あのねぇ･･･」

荊澤「果報とは、因果応報のこと」

小尾「え」

荊澤「因果応報とは。悪いことが返ってくるような意味でつかわれているけど、本当はいいものも悪いものも、結果はすべて自分がつくるという意味の仏教用語。果報は寝て待ては、本当に眠って待つのではなく、人事を尽くしたらあとは待つだけという意味」

田辺「荊澤さん？」

荊澤「はっ！」

田辺「なんかすごい語っていたけど」

荊澤「え、あ、ううん。なんでも、なんでもないの。気にしないで」

小尾「気にしないでって言われても…。因果応報とかすごく語ってなかった？…あれ、亀谷くん、どうかした？」

亀谷「あ、いや、うん、あの、なんでもないんだ」

田辺「２人とも変だな」

亀谷「（焦って）だーかーら、何でもないって！ほら、休みたいってのはホント！昨日あんま寝てなくてさ、ここに蒲団あったら秒で寝れる」

荊澤「蒲団」

小尾「え」

荊澤「蒲団とは座禅用の敷物のこと。蒲という植物をまるく編んだことに由来する仏教のことば」

田辺「へぇ、そうなんだ」

荊澤「そうなの。玄関、喫茶、掃除。仏教由来のことばはわたしたちの生活にもかなり根付いているの」

亀谷「お、荊澤さんっ！も、もしかしてっ」

荊澤「はっ！ご、ご、ごめん！な、な、な、なんでもない！」

田辺「なんでもないって様子じゃないけどな。亀谷、おまえもなんか変じゃないか」

亀谷「（焦って）変じゃない」

小尾「あー、だめ、僕、ちょっと限界！一回休憩！蒲団もないし！ホントに寝れはしないけど！（やけくそな感じ）…その間に僕、もうひとりの委員呼び出してもらってくる…」

・小尾は、フラフラと部屋から出ていく。舞台上手前方へ（照明）。

小尾「･･････ちょっと、あの３人いったい何なわけ！？このままじゃ僕の輝かしい計画の第一歩が台無しになっちゃうじゃないか…。何が蒲団だ！なぁにが因果応報だ！！」

小尾「･･････僕、何やってるんだろ･･･。とりあえず、４組の実行委員を呼んでもらおう･･･」

・小尾はける。

亀谷「それにしても、オープニングイベントをイチから企画原案完成提案まで１日しかないって、かなり無茶ぶりじゃないか」

田辺「そうだな。何かウラがある気がする」

荊澤「ウラ？」

田辺「ああ、日程的にタイトだとかそういうレベルじゃない。厳しすぎる。これは、何かの思惑がなければこんなことにはならないはず」

亀谷「思惑」

荊澤「本当は、例年通りやろうとしていたことを、急にイチからやることにしたとか…？」

田辺「そうだな。そうとしか考えられない」

・ぴんぽんぱんぽーんと呼び出しチャイムが鳴る。

先生（声）「４組沼田、４組沼田。実行委員会の件で話がある。至急職員室まで来なさい」

亀谷「おっ、早速呼び出しかかってる」

田辺「もう一人の実行委員は、４組の沼田だったか･･･」

荊澤「田辺さん、知ってるの？」

田辺「ほぼ学年全員の名前と顔と所属する部活動、趣味や特技くらいなら知っている」

亀谷・荊澤「え」

田辺「人間観察が好きだといったろう」

亀谷・荊澤「マジで…」

亀谷「（話題を変える）それよりさ、荊澤さんの好きなものって何？さっき、話途中になっちゃったじゃん」

田辺「そうだったな」

荊澤「えー、好きなものかぁ、１つしかないんだよね、わたし」

亀谷「そうなの？珍しい･･･いや、そうでもないか」

荊澤「その１つが好きすぎて、ちょっとね」

亀谷「どういうこと？なんか謎めいてる」

田辺「そういえば、荊澤さんのことは私もよく知らないな」

亀谷「（からかう）あっれー、学年全員の名前と顔と趣味特技知ってるんじゃなかったけ～？」

田辺「おまえ、そういうところあるよな。話はしっかり聞いてろよ、私は、ほぼ、と言ったんだ。荊澤さんは、ほぼではない少数の方に入っている」

荊澤「まぁ、わたし、あまり目立たないように生きてるからなぁ」

亀谷「え、何で。なんかあった？力になろうか？」

荊澤「いえいえいえいえいえ！別に何もない何もない。人間嫌いになってどうしようもなくなってしまった過去のトラウマとか、孤独を愛する女、とかそういう設定ないから」

亀谷「そうなんだ」

田辺「おまえ、今、何かがっかりしてないか」

亀谷「してない、してないよっ。（荊澤に）っていうか、何で？」

荊澤「あんまり、人と親しくなると･･･」

亀谷「うん」

荊澤「困ったことが起きるから･･･」

亀谷「どんな？」

荊澤「語っちゃうの」

亀谷「ん？」

荊澤「自分の好きなこと語りまくってどん引きされるの」

亀谷「へ？」

田辺「なるほど、それで先ほどの話につながるわけだ」

亀谷「さっきの話？」

田辺「自分の好きなことを話すのにためらいあっただろう」

亀谷「そっか！荊澤さん、いいよ、いいよ。ここは気にしなくてさ！クラス違うし、学園祭のためだけの集まりだし、委員長はまだ帰ってこないし、遠慮なく語っちゃって！な、田辺、いいよな！」

田辺「そうだね。私も荊澤さんのことに興味がある」

亀谷「おまえ、まさか」

田辺「（呆れ）何を想像してる」

荊澤「えー、でも、今は家族以外に話してないし、話し出したら止まらなくなるかもしれないから、なんか悪いよ」

亀谷「いいから、いいから！」

荊澤「そう？･･････あのね、わたしね･･･（間）」

亀谷「うん」

荊澤「わたし、（間）仏女なの！」

亀谷「えっ」

田辺「ほう」

荊澤「わたし、ホントに仏教っていうか、仏っていうか、仏像が大好きで、もう、何時間でも眺めていられるっていうか、語り出したら止まらなくなるんだよね。あ、はまったきっかけは、それはもう仏像なんだけど、阿修羅って知ってる？興福寺の。知ってるよね、有名だもんね。日本史の資料集にも載ってるもんね。日本人の常識だよね。あれ、あれ初めて見たときにビビッっと来たの！９歳のとき！文字通り体中を電気が走り抜けたわ！思えばあれがわたしの初恋だったのかも！あ～ん、あのお顔！あの正面のきりっとした決意ある表情も素敵だけど、右のお顔も左のお顔もヤバイ！特に、あの右のお顔の悲しそうな表情してるのもう、胸がぎゅっと締め付けられるよね！あれは、一説によると人間を哀れんでくださっているっていうんだけど･･･。（それに、軍神っていう設定もかっこよすぎない！？戦う神から仏法の守護神への華麗なる転身。それがお釈迦様に出会ったからだっていうんだから、お釈迦様もマジやばいよね。･･･しばらく続く）」

亀谷「はっ！心がどこかに行っていた！」

田辺「なるほど、これで先ほどの因果応報、蒲団のくだりが理解できた。それにしても、これは、想像以上」

亀谷「ちょちょちょ、荊澤さん！荊澤さん！」

荊澤「えっ、これからがいいところなのに。まだ阿修羅の魅力３％しか語ってないよ？」

田辺「ということは、阿修羅だけでこのあと９０分以上話せるということだな」

亀谷「あ、いや、邪魔するつもりはなかったんだけど、急にぶわーって話し出したから、ちょっとびっくりしちゃって」

荊澤「（我に返る）あ、またやっちゃった･･･（悲しそうに）。こうなの、そう、こうなっちゃうから、結局どん引きされてひとりでひっそりと楽しむしかなくなっちゃうんだ･･･」

亀谷「いや、あの、びっくりしただけで、話聞かないなんて言ってないって！聞く、聞くよ！」

荊澤「聞いてくれるの？ありがとう、亀谷くん、やさしいんだね」

亀谷「いや、その、いや、まあ」

田辺「これは、何かのフラグが立った瞬間か？私、お邪魔かな」

亀谷「田辺！何言ってんだよ！（焦る）。いや、荊澤さんね、これはね」

荊澤「本当にうれしいな。今まではどん引きされて、もう２度と話を聞いてもらえなかったから。

田辺さんも、ありがとうね」

田辺「いや、ま、興味本位程度で関わろうかな、というぐらいのもので」

亀谷「おい、おまえもフラグかよ」

田辺「だから、なんでそう考えるんだ」

荊澤「学校って、家にはないいろいろなものがあるじゃない？だから、すごく夢がふくらむっていうか、仏女魂が揺すぶられるんだけど、学校じゃ駄目ってずっと押さえてきてたんだよね」

亀谷「そうなんだ。でも、そんなにはっきり仏女って自分から言ってもいいの？」

荊澤「別に隠しているわけじゃないもの。ただ、相手を引かせちゃうのが申し訳なくて、言ってないってだけだし、それに、やっぱり自分の好きなものははっきり好きーー！って言いたいし、自分が認めないとね！」

亀谷「荊澤さん･･･」

田辺「いいんじゃないか、趣味趣向はひとそれぞれ。それに、荊澤さんは、人に申し訳なくて言ってないだけで、今みたいに受け入れてもらえるならどんどんオープンにしたいってことだろう？」

荊澤「そうなの！」

田辺「なら、問題ない。今は委員長もいないし、荊澤さんの話から、何かオープニングイベントのヒントになることも、本当に出てくるかもしれないからな」

荊澤「じゃあ、やりたいことあるんだけど…、一緒にいい？」

・ＢＧＭ

・暗転。

・照明暗いまま。

亀谷「なにも、見えないな」

田辺「ああ」

荊澤「目の前の自分の手さえ見えないのよね」

田辺「これは、なかなか不安におそわれる状況だ」

亀谷「おっ、田辺も不安なんて感じることあるんだな」

田辺「亀谷、おまえ、私をなんだと思ってるんだよ」

亀谷「あはは」

荊澤「しっ、静かに」

・しばらく無音。少しすると、バタバタと足音が聞こえてくる。

小尾「おまたせー！って、めちゃくちゃ暗いんだけど！３人ともいないのー。ってあれ、この感じなんか覚えが…」

３人「（無言）」

小尾「ま、いいか。とりあえず、電気電気～～（ポチッ）」

・電気がつく、明るくなる。振り返ると、３人が普通じゃない様子でいる。

小尾「かうｙｇふぃうｒヵんだｊｄしｓじゃおｊかぁ！って！いっ、いるじゃないか！いるなら返事してよ！」

亀谷「いやー、ごめんごめん。なんかおもしろくなっちゃって」

小尾「田辺さんまでいる！何やってるの！」

田辺「なんちゃって胎内めぐりだな」

小尾「え、なに、なんちゃって･･･？」

荊澤「胎内めぐり！」

小尾「えっ、たいないめぐりって･･･」

田辺「お堂の地下にある暗闇を巡って穢れを祓うんだ。この闇を仏の胎内に見立てて通ることで生まれ変わるという意味合いがある、そうだよね（荊澤に）」

荊澤「さすが、田辺さん。もう覚えちゃったんだ」

亀谷「ちぇ、さすが学年１位は違うな」

田辺「ほとんどの教科で１位の私だけど、日本史と古典は絶対に勝てない相手がいるんだけどね」

荊澤「あ」

亀谷「え」

荊澤「田辺さん、気づいてたんだ」

田辺「言ったでしょ。荊澤さんに興味があるって」

荊澤「仏像好きから、仏教好きに、さらには歴史好きになっていったのよねぇ。そして、必然的に古文まで好きになってしまったんだ」

小尾「ちょっと、ちょっと何の話」

荊澤「審神者が刀剣女子になり、本物の刀剣へはまっていく過程には共感を覚えたわ･･･（かっこつけ）」

亀谷「わかる」

田辺「わかるのか」

亀谷「（焦って）あ、ああ、まあな」

小尾「だから、何の話なの！」

田辺「荊澤さん、仏女なんだそうだ。仏教仏像全般にかなり詳しいぞ」

小尾「そうなんだ。……って、そんなこと聞いてない！っていうか、最初に僕が来たときに荊澤さんがやってたのって、これだったのね！（怒）」

荊澤「…まぁまぁ、委員長、落ち着いて。ほら、学校内って視聴覚室のカーテンよくできてるからすごく暗くなるし、ついね。……それよりも！委員長がいない間に、わたしたちね、頑張ったの！」

小尾「えっ、そうなの？やだ、それ早く言ってよー。入ってきたら暗闇だったから、３人でくだらないことしかしてなかったって、決めつけちゃったじゃん」

荊澤「見てくれる？」

・小尾がうなずく。

・ＢＧＭ

・荊澤、亀谷、田辺が舞台中央にて、フォーメーションを作っていく。

荊澤「阿修羅像～～！」

・小尾は口が開いたままで、意識喪失。

亀谷「委員長、どう？」

小尾「（ハッと気づいて）ななななななな、なんなのーーーー！！」

荊澤「何って…」

亀谷「阿修羅だよな」

荊澤「あこがれだったんだ～。これやるの。やっぱ一人じゃ阿修羅の三面六臂できないから…（照れ）」

小尾「いや、なに照れてんの。田辺さん！君も君だ！なんで一緒になってやってるの！」

田辺「いや、私のことどう思っているか知らないけど、面白いことには目がなくて」

小尾「ストッパー不在。完全アウェイだ、僕。……ハッ！じゃあ、頑張ったのって…」

荊澤「うん、なかなかこの絶妙な感じが出なくってね」

小尾「学祭イベントのことじゃなかった！！！！」

・阿修羅が成功したことに沸く３人。小尾は絶望的な表情。

小尾「なんで、なんで、こんなことになってるんだ…。神様、助けて…」

・突然、沼田が入ってくる。一同驚く。

沼田「あー、うっぜ、マジであいつウッゼー」

亀谷「うわっ！びっくりした！」

小尾「今度はなに！？」

沼田「あぁ？ここ、学祭の委員会の場所だろ？委員だから来たんだけど、オレ４組の沼田」

荊澤「ああ、あと１人の」

田辺「時間はだいぶ過ぎてるぞ」

沼田「うっざ！もう、担任にさんざんウゼぇこと言われて来たんだから勘弁しろよ！別にこの委員会忘れてたわけじゃねぇし、ちょっと用があって遅れただけなのによぉ、職員室呼び出しやがって！担任の説教でさらに遅れたってーの」

小尾「あ･･･、なんかまたやっかいな気配。３人だけでも手に負えてないのに･･･」

荊澤「４組の先生怖いもんね」

沼田「そうなんだよっ。委員会なんてやりてえやつがやればいいのに、最初っから全部くじ引きで決めたんだぜ、あいつ。だれも担任に逆らえねぇの分かっててやってんだから、タチがわりぃんだよ！」

亀谷「ぜんぶくじ引き！」

田辺「それはなかなかだな」

小尾「･･･ということは、きみはこの委員会に入りたくて入ったわけではない？」

沼田「ああ？そうだけど？」

小尾「頭痛くなってきた･･･」

荊澤「えっ、委員長、大丈夫？」

小尾「きみに心配されても」

荊澤「ん？どういうこと？」

小尾「いいの、こっちの理由。ほっといて」

荊澤「え、ほっとけないよ」

田辺「荊澤さん、おそらく委員長にとっては、話し合いを進めてあげる方が、親切だと思うよ」

荊澤「そうなの？」

小尾「うん、確かにそう。でも、田辺さん、きみがそれを言うってことは、やっぱり、確信犯ってことだよね」

田辺「だから、おもしろいことが好きなもので」

小尾「そうだった…（がっかり）」

・小尾と田辺の間で目に見えない火花が散る。荊澤や亀谷はよくわかっていない。

沼田「んじゃ、話し合いしようぜ。委員長はそうするのがいいんだろ」

小尾「（ハッとして）えっ、ああ、そう、そうだよ」

沼田「じゃ、早くやろう。んで？何の話してんの？」

小尾「この集まりは、学園祭実行委員の中でも、オープニングイベントについて決めるもの」

沼田「オープニングイベントぉ？あ、だから人数少ねえんだ。担当ごとに分けてやるってなかなか合理的」

小尾「そう、そうなんだ！わかってるじゃん！」

亀谷「あ、そうか！委員５人だけって…。人数が少ないってそういうことか！」

田辺「今頃気付いたのか」

荊澤「今頃気付いた…」

田辺「荊澤さんもか」

沼田「そこ！そのラブコメやめろ！じゃ、さっさと話しあおうぜ。んで、去年なんだっけ？確か、ダンスだったと思うけど…。そうだ、確か６人くらいでダンスして、オープニングコールしたんだったけなぁ。そういや、委員長も出てたんじゃねーの？」

小尾「そう！そう！僕も、出てたのよ！」

亀谷「よく覚えてるな」

沼田「ま、なかなか面白かったし？んで？今年はどうすることになったんだぁ？またダンスかぁ？」

田辺「いや、まっさらな状態から考えるってことで、話をしてたところだ」

沼田「なんで、イチからなわけぇ？いいじゃん、別にいつもとおんなじ感じで、はやりもの入れてさぁ」

小尾「あの、それはね…」

沼田「わかった、アレだ！いつもと同じ感じで～っていうより、生徒の一生の思い出に残るようなオープニングイベントをっ！って感じじゃね？いいね、そういうの嫌いじゃない」

小尾「（よろこぶ）神！」

沼田「へぇっ？」

小尾「ごめん！正直きみのこと、見た目とか言動とかで決めつけてた！でも、今、はっきりとわかった！きみは、僕の救いの神だって！」

沼田「いや、神って、なんだよ、それ。なんか、かゆい言葉なんだけど…」

小尾「いい！いいっ！きみはそのままでいいっ！僕が勝手に神と崇めるだけだからっ！」

沼田「（照れ）いや、あのそういうのいいって…」

荊澤「えー、なんか、神って響き、嫌だなぁ。個人的には天！帝釈天、帝釈天良くない？」

亀谷「いい！毘沙門天、増長天、持国天、広目天の四天王を配下とし、須弥山の頂上忉利天に住むとされる仏教二大護法善神！」

荊澤「そうそう、阿修羅のライバル！帝釈天は京都の東寺こと教王護国寺の像がいいのよ～」

亀谷「マジで？見たいな。でも、遠いからとりあえず柴又帝釈天だな」

田辺「亀谷…、隠す気もはやゼロだな」

沼田「（３人を見て）あ、なんか、分かった気するなぁ。……委員長、あんたも大変だな」

小尾「分かってくれる～？神様！」

沼田「（照れ）ウザイ！マジで神ってのは無理！マジうざっ！も、名前で呼べよ！……んで？話どこまで進んでんだぁ？集合時間からけっこう経ってるんだけど、ほれ、どんな意見出たか言ってみ？」

小尾「それが…、まだ何にも」

沼田「はぁ？これだけ話しててまだ何も？ホントにこれっぽっちも話進んでねえわけぇ？マジないわ」

小尾「うん、マジない」

沼田「んじゃ、逆に何してたんだよ」

亀谷「自分の好きなことを話しているうちに、何か新しい発想が出るんじゃないかと考えて…」

沼田「おう」

荊澤「それで、ちょっと好きなものの話してたら…」

沼田「おう」

田辺「今に至る、だな」

沼田「それだけかよ！それでこんな時間まで盛り上がる話なんてなんだ？お笑いかなんかか？芸能人とかの話くれえしか、オレには浮かばねぇんだけど。委員会の話し合いそっちのけで、話してたことって何だよ？逆に興味わくんだけど」

小尾「あ、あの、神様！それは振ってはいけない感じですよ…？」

荊澤・亀谷「ほとけ！」

沼田「ほっとけ？あぁ？お前ら、オレにケンカ売ってんのかぁ！？話聞いてやろうとしてんのに、ほっとけってどういうことだよ！？（怒）」

亀谷「違う違う！ほっとけ！じゃなくて、ほとけ！」

沼田「（怒りのまま）あぁ？また、ほっとけって言いやがったなぁ！マジウゼえ！」

田辺「沼田、落ち着け」

沼田「はぁ？落ち着けるわけねーだろ！こんなふうに突き放されてっ！」

田辺「よく、聞いてみろ」

・沼田は「はぁ？」とイきりながらも、何回も深呼吸して落ち着こうとする。なぜか、小尾も一緒に深呼吸。落ち着いたところで、亀谷、荊澤の順に目線をやると、それぞれ真剣に答えていく。

亀谷「ほとけ」

荊澤「ほとけ」

田辺「な？」

沼田「ほとけ？」

荊澤「そう、ほとけ！……仏像とか仏教の話してたの」

沼田「…仏教。……ま、紛らわしいこと言ってんじゃねーよっ！」

亀谷「それはゴメン」

荊澤「ごめんね」

沼田「……いや、うん、オレも、ちょっとは悪かったよ…。オレだって、一方的に決めつけた」

小尾「神さま」

沼田「我は沼神じゃ～」

一同「ははぁーーーーーーーーっ」

沼田「………お前はそういうヤツだって決めつけられるのが、オレのいちばん嫌いなことだってのによ。そうされすぎて、自分もそうするようになっちまったのかな…」

荊澤「大丈夫だよ！人は変われるもん！わたしだって、沼田さんのことよく知らなかったけど、今のちょっとの時間で沼田さん、いい人だなって思えるようになったし」

亀谷「そうだよ！」

田辺「そうだな。お前は、そうやって人に眉を顰めさせるような言動をしているが、本当は優しいやつだと知っている」

沼田「え」

田辺「この委員会に遅れてきたのも、来る途中に階段で具合が悪くなった生徒を保健室まで送り届け、おそらく保健の先生がいなかったのだろう。先生が戻るまで付き添っていたと推測できる…。というか、一度遅れることを伝えにここに来たな？」

沼田「おい、それ、なんで。ちょっと怖ぇんだけど」

田辺「そんなことはまあいい。ただの趣味だ。それより、月並みだが、人は自分自身を変えることができる。（間）そうしたいという気持ちがあればな」

沼田「なんか…怖いまままとめられた…」

荊澤「そうだよ！わたしの大好きな阿修羅だって、最初は戦闘神なんだよ！娘を帝釈天に奪われた怒りで、戦いを挑みまくるの！そのうちになぜ戦っているのか分からなくなって、ただ戦うことだけに執着するようになる…。でも、お釈迦様に会ってその教えを受けて、すっかり心を入れ替えるの。今じゃ、仏法の守護神よ！あぁ、お釈迦様入滅のときの、悲しんだ阿修羅の顔マジ神だわ！っていうか、ホントに神か！そのシーンの像、いろんなところにあるけど、おすすめは、法隆寺五重塔ね！」

小尾「いい話のハズなのに…」

田辺「やはりそっちへ行くか。荊澤さん、ブレないな」

沼田「ふふっ、おまえら…面白いな！ほとけ、ほとけな！ほとけ、仏教好き！今のでよく分かったわ。…そっか、戦闘神だって、守護神にかわるって、おかしいけどすげえ説得力。なんか、すとんと来たわ」

小尾「だめ、神様、理解を示さないで…」

沼田「今時の仏女ってヤツね」

小尾「仏女という明確な地位をこの場で与えないで！」

沼田「委員長、固ぇこというんじゃねーよ。いいじゃん、好きなものを好きって言えるのは」

田辺「そうだぞ、委員長。仏女はウィキペディアにも載っているれっきとした公的用語だ」

小尾「ウィキに載ってるから公的とは言わないと思うけど…」

沼田「んで、（亀谷に）あんたは…、仏男だな！」

荊澤「仏男（笑う）。違うの想像しちゃう」

田辺「それはウィキペディアにも載ってないと思うぞ」

亀谷「いや、いいんだ、おれはそれでいいんだ！そうだ！オレは仏男だ！！」

田辺「お、ついに隠すの、やめたか」

亀谷「おう、なんか荊澤さんや沼田さんと話してるうちに隠すのバカらしくなってきてさ」

田辺「隠せてなかったけどな」

亀谷「うるせー」

沼田「ま、おまえらが好きなもの話してて暴走して、話進んでないってのはよくわかったわ。委員長、やっぱ大変だな。（田辺を見て）とめてくれそうなやつも、とめてくれねーみたいだしな」

小尾「やはり神様……！！」

荊澤「なんかさ、ちょっと団結感出てきた気がしない？」

沼田「おう、それ、オレも感じてたわー。まだちょっとした経ってないのにな？これも、ほとけの力か？」

荊澤「かも！……ね、亀谷くん、あれやろうよ、あれ！」

亀谷「あれって…？あ、あれか！」

小尾「いやな予感が…」

田辺「４人いればできるな、確かに」

・ＢＧＭ

・荊澤、亀谷、田辺が沼田を誘って（時間かけて良い）仏像ポーズを完成させていく。ほうきとか適当な道具も持つ。

・小尾は上手サスへ。

小尾「あーーーーー、もう、僕の計画めちゃくちゃだー！！……志望校、合格判定にとどかないから、活動評価型入試で何とかと思って、学園祭実行委員に立候補して、委員長になったのに！学園史に残るような学園祭にするどころか…始まる前から完璧に挫折っ！！」

・田辺が仏像ポーズ作っている途中で小尾の方へ。

田辺「そういうことだったんだな」

小尾「あ、今の、聞いて…」

田辺「ま、いいんじゃないか。動機はどうであれ、学園祭を盛り上げようとしている事実には変わりないんだからな」

小尾「田辺さん」

田辺「私も、今を楽しむのみ、だ」

・田辺が仏像ポーズ組に戻っていく。

小尾「あ、今、なんか、またいい話っぽくされた…」

・小尾がとぼとぼと仏像ポーズ組の元へ。そうこうしているうちに完成する。

荊澤「不空羂索観音像～！」

亀谷「委員長、どう！？」

小尾「（気力ない）どうって言われても…」

荊澤「（はしゃぐ）東大寺三月堂こと法華堂の中央にある仏像…！やっぱ手が８本っていいわぁ。４人いないとできないから……これでまたひとつ夢がかなった」

亀谷「じゃ、次の野望は千手観音か？たしか、１本の腕で２５の世界を救うんだよな。４０本必要だから、２０人か！なかなか厳しいぞ！」

荊澤「本当は４２本腕あるし、２１人ね。でも、それはまだ通過点。やっぱり最終目標は…」

亀谷・荊澤「マジで千本！五百人で千手観音！」

田辺「息合いすぎだ。ま、物理的に無理だろうってことは、指摘しないでおいてやろう」

沼田「いや、思ったよりおもしれえじゃん！これ、オープニングイベントでやればよくね？」

小尾「ちょっと、神様！それはいくらなんでも…！」

沼田「ええ、いいと思うんだけどなぁ。世の中には、千手観音ダンスっていうのもあるくらいだし？」

小尾「あーーーー、とめる人がいなくなるーーーーーーー！！！」

田辺「今日方針を決めて、明日１、２年生の委員に指示を出すんでしょ？ここで決めておかないと厳しいって言ってたよね？」

小尾「田辺さんに言われるのマジでムカつく―！僕の野望がぁぁぁあ」

荊澤「どうしよ、亀谷くん、実現出来たらうれしいんだけど」

亀谷「オレもだよ」

小尾「そこは何かラブな空気っぽいしぃぃぃぃぃぃぃ！！」

・ＢＧＭ

・騒がしくなる教室内。荊澤がひとり、舞台前に出てくる（照明アテ）。

荊澤「さて、学園祭のオープニングイベントがこの後どうなったのか。果たして、ほとけイベントになったのか、そうではなかったのか。そのあたりはみなさんのご想像にお任せします。好きな結末を想像して楽しんでくださいね。でもまぁ、どういう展開になったとしても、世の中たいていのことはなんとかなるもんです。色即是空。空即是色。お釈迦さまによると、この世のあらゆるものには実体がなく、実体のないもの、それがすなわちこの世の中とのことです。難しくて何言ってるかわかんないけど、実体がないっていうなら、とことんやりたいこと、やるべきことやっていこうって、私は思います。みなさんは、どうでしょうか」

・小尾が荊澤に気付いて、叫ぶ（照明アテ）。

小尾「ちょっと！この話、なんかいい感じで終わろうとしてない！？ここまでそんないい流れほとんどなかったじゃん！！」

荊澤「（笑って）それもそうだね。さて、この話はここでおしまいです。意味のない話の中に、何か意味があったら、それもうほっとけないって感じで！」

小尾「無理やりタイトルにこじつけない！」

・ＢＧＭ大きく。

・荊澤が４人の輪の中に入っていく。閉幕。ＢＧＭフェードアウト。